



Title	＜紹介＞後藤昭雄監修大阪大学三宝感応要略録研究会 編『金剛寺本『三宝感応要略録』の研究』
Author(s)	勢田, 道生
Citation	語文. 2008, 90, p. 59-60
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69110
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

紹介

後藤昭雄監修・大阪大学三宝感应要略録研究会編

『金剛寺本『三宝感应要略録』の研究』

勢田 道生

遼・非濁撰『三宝感应要略録』（以下、適宜『要略録』とする）は、いわゆる逸存書の一つであるが、我が国へはその成立後、早くに将来され、『今昔物語集』・『三國伝記』などの説話集をはじめ、中世の文学に大きな影響を与えたことはいうまでもない。

本書は、大阪大学大学院において、後藤昭雄氏を中心として平成三年に立ち上げられ、以来研究を重ねてきた大阪大学三宝感应要略録研究会における、金剛寺本『三宝感应要略録』についての研究成果をまとめた上、関連論考三編を収めたものである。後藤氏の大阪大学退職の記念として企画され、氏の監修のもと刊行された。なお、研究会の結成から本書刊行に至る経緯については、本書所収、海野圭介氏「大阪大学三宝感应要略録研究会の歩み」を参照されたい。

本書が対象とする『三宝感应要略録』金剛寺本は、後藤氏の見出されたもので、上巻のみの残欠本ながら、仁平元（一一五一）年の書写奥書をもち、現存の知られる伝本のうち、書写年代の判明しているものとしては最古のものである。本書には、金剛寺本の影印と翻刻に加え、尊経閣文庫蔵本（寿永三年写）と慶安三年版本とによる校異が示された上、校訂本文とこれに基づく訓読文

が収められる。また、慶安版本の影印が付され、利用の便が図られている。

論考編として収められるのは、以下の三編である。

山崎淳氏「『三宝感应要略録』類話・出典注記関連記事一覧」は、金剛寺本の存する上巻について、『要略録』各話の出典注記や類話に関する情報を一覧にしたもの。『要略録』の成り立ちや享受について、検討の手掛かりとして参照すべきものである。

後藤昭雄氏「金剛寺本『三宝感应要略録』金剛寺本をめぐって」（初出『説話論集』一四、清文堂、平成一六年）は、金剛寺本と尊経閣本および慶安版本とを比較検討し、金剛寺本の価値を測定するもの。金剛寺本は、尊経閣本と同様、誤写・誤脱を免れないが、この二本が相補い、好適な本文を得られることが指摘される。

荒木浩氏「『今昔物語集』に於ける『三宝感应要略録』続貂」は、『今昔物語集』が仏法伝来史をいかに描いたか、『要略録』利用の観点からその様相を探る。『今昔』の震旦仏法伝来史の転回点が、『要略録』依拠の偏差と即応することが示され、『今昔』における『要略録』利用の意味を考える上で、示唆に富む。

本書に先んじて刊行された小林保治氏・李銘敬氏著『日本仏教説話集の源流』（勉誠出版、平成一九年）には、李氏による『要略録』についての諸論考とともに、尊経閣本の翻刻と訓読文とが収められている。同書に続き本書が刊行されたことにより、『要略録』についての基礎的な研究環境は整ったといえる。今後の研

究の進展が期待されるところである。

(勉強出版、二〇〇七年二月、二七二頁、一六、八〇〇円)
— 本学博士後期課程 —